

血だまり森の屍姫



エンジン

――燃えさかる戦場を、母と二人で逃げ続けた。

父は腹をかつさばき、果てた。

弟達は槍で突き殺され、女中達は何人もの足輕に姦された挙げ句、鶏のように首を落とされた。

母は短刀で喉を突き、自ら命を絶った。

そして今、森の中にいる。

歩いても、歩いても、何処へも辿り着かない。

肉体は、とうの昔に朽ち果てた。

一体、どれほどの月日が流れたであろうか。

時経ても、我が恨みは消えぬ。

この深い怨念、解き放ってくれる者は、いないのか――

割れんばかりにきしむ階段を上がり、たてつけの悪い障子を開いた。焼けた葉のつんとした臭いが喉に絡みつき、思わず咳き込む。

いつもと変わらず、祖父は紺の狩衣を纏い、古めかしい神具が並べられた四畳半の部屋で、今にも腐って崩れ落ちそうな神棚に向かって幣（ぬき）を振り回しながら、意味が分からないまじないを詠んでいる。

「・・・行ってきます」

いつも通り返事はないと思い、戸を閉めて出て行こうとすると「待て」と呼び止められた。

「これを見ろ」

祖父は神棚に置かれた丸い神鏡を指差す。錆一つないその鏡面を袈裟に切り裂くように、大きなひびが走っていた。

「さっき勝手に割れおった。これは吉凶の前触れかもしれん」

祖父はこちらを見やることなく、呟くように話し続ける。

「もし森に異変あれば、戻って知らせろ」

このようなことを言われたのは初めてだ。ただでさえ嫌なのに、ますます気が重くなる。でも、ここで休むなんて言い出せば、祖父は私を幣で打つだろう。

階段を降りて、お供えを取りに行く。今日は私が当番なのだ。

私の家の裏には、森がある。一応、先祖代々の土地ということになっているらしいが、手入れどころか中に入っている人間すら見たことがない。

ひっつき虫だらけの草むらの中に作られた野道を少し進むと見えてくるその入り口は昼間でもぽっかりと、空間に穴でも空いているように存在しているが、それが暗くていかにも陰湿な気配がする。

その門の周囲には、何百年も前に縫われたのであろう、自然の汚れと経年で黒ずんだ注連縄が、腰の高さぐらいある二本の厳かな模様の入った石柱の間に張られ、入り口を塞いでいる。

周囲には、おそらくこれも遙か昔に造られたと思われる幾つもの柵で完全に囲まれていて、この場所以外から入ることは難しい。

その奥には荒い道が続いているようだが、昼に行っても暗く、到底中に入ろうとは思えない雰囲気漂っている。

それほど広い森林ではないが、地図で見ると、その果ては海沿いの急な断崖に面していて、どこにも通じていない。

子供の頃、何気なく祖父にこの森について尋ねたことがある。私の言葉を聞いた途端、祖父はたるんだ皺に包まれた顔を途端に強ばらせ、幼い自分の孫娘に平手打ちを喰らわせた。

「そんなこと、余所の人間には口が裂けても言うな！」

真っ赤に腫れた頬を抑えて泣きじゃくる私に向かって、祖父は乱暴に言い捨てた。以来、私もそれについて、いわゆる「禁忌」であると幼心に理解したので、一切口に出さなかった。

だが、亡くなった祖母から、この森に伝わる話を聞かされたことがある。

この森は奈良時代の古文書にも記述があるぐらいの歴史を持っているのだという。名前は忘れたが、はるか昔の天皇に寵愛されていた娘がこの地で命を落としたことがきっかけで、今で言う「禁足地」の一つと定められたのが始まりらしい。

それから何百年の間、この付近に神社が存在していたらしいが、これは平安時代に記された寺社録に名前が確認できるだけで、実在を証明する遺構等は全く見つかってない。それより後の時代の史料からは神社の存在に関する記述が一切認められず、あたかも最初からなかったかのような扱われ方をしている。

私達の先祖との関わりは、戦国時代に起きたある出来事から始まった。

当時この地を拠点としていた二つの勢力があった。箕山氏と追川氏、互いに勢力は拮抗しており、永きに渡って争いを続けていたが、ある時起こった総力戦に箕山氏が勝利、一族や領民の助命と引き替えに、追川の当主は自害した。

だが、日頃からの残忍な振る舞いで知られた箕山の当主はこの約束を破り、殲滅戦を開始。追川の一族郎党、そして民までもが皆撫で斬りにされ、女どもは年関係なく犯された後殺害された。

戦火の中を必死で逃げおおせた当主の妻と娘は、やがてこの場所へとたどり着いた。だが、二人とも疲労でもう走ることができない。追っ手はすぐそこまで迫っていた。捕まえられればどうなるか、彼女らが一番よく知っている。

運命を悟った母は、娘をこの神聖なる森の中へ逃がした。そしてそれを見届けた彼女は短刀で喉を突き、夫の後を追った。

やがて追っ手がたどり着いた時、森の入り口には侵入者を阻むようにして倒れた女の亡骸と、夥しい血だまりができていた。

娘を追うため、足輕の一人が血だまりに近づいたその時、足輕はにわかには苦しみをだし、まるで狂犬のようにうなり声を上げ、周囲の仲間達に襲いかかり、何人かを食い殺した後、泡を吹いて狂い死にしてしまった。

禁足地ゆえ焼き払うこともできず、足を踏み入れようとすれば必ず凶事が起きた。以来、この場所は天皇家の人間ですら足を踏み入れることのできない禁忌の地とされ、娘の行方もしれないのだという。

我が家はその箕山方の武将の家系であり、代々この森を監視する役目を仰せつかったのだそうだ。

「あれに何かあったら、真っ先に逃げるんだよ」

私が唯一心を許せた祖母は、多い茂った木立を眺める度にそのようなことを言っていた。

その祖母も数年前、仏間で首を括り自ら命を絶った。

涙一つ見せないどころか「腐る、はよどけんか」と駐在に向かって言い放った祖父のふてぶてしい顔は、今でも目に焼き付いている。

そんな冷徹な祖父ですら、いや、だからこそなのか、代々の風習を欠かしたことはなかった。

端から見れば奇っ怪な決まり事を、私達の家族、ひいては代々の先祖が長い間続けていた。

今日のお供えは、高く盛った強飯に、芋の煮っ転がし、目刺しが四匹に、剥いたびわの実。いつもと同じ朱色の食器に用意されている。

毎晩19時、家族の誰かがこれを森まで運ぶというのが、我が家代々の風習である。

このお供えは、必ず家族の夕食とは別物でなければならず、毎日新しいものを作らなければならない。器や調理器具ですら特別のものを使うのだから、徹底している。

そして出来上がったものを、一人で持って行かなければならない。街灯すらない真っ暗な道を、なんとか眼を慣らしながら進まなければいけない。懐中電灯も持ってはならない。

舗装されていない野道は凹凸の段差が激しく、また大きな石もポツリポツリと転がっている。下手に転倒して打ち所が悪ければ、そのまま死ぬ。実際、一族の中にもそういった事故が原因で亡くなった人がいるらしい。

五歳の時から、私もこの仕事をさせられるようになった。大人は誰一人ついてきてくれない、町へ買い物すら行けないような女兒を、彼らは真夜中の野道に放り出すのだ。

最初の頃、夜道を歩くのがすごく怖くて、玄関の方に振り返って半べそを掻いている私を見た父はすごい剣幕で「さっさといかんか！」と怒鳴った。

両手でお供えの盆を抱え、冬の風に吹かれながら道を進んでいく。

森の門の前には供え物を置き、翌朝、空になった食器を取りに行く。大体的場合、器には野菜の茎やご飯粒を残して、何も残っていない。

勿論、狸や野良猫が食べたに決まっている。彼らに餌をやっているのと同じだが、こんな意味もないことを何故、私達の家族は酷く恐れ敬っているのだろうか。

我が家は近所づきあいというものがほとんどない。私の家族が皆不愛想というのもあるが、どうやら件の風習が原因で、向こうからも避けられているようだ。

私は今年で15歳になるが、今まで友達というものが出来たことがない。苛められたこともないが、遊びの誘いを受けたこともない、まるで腫れ物のような扱いだ。

ただ一人、現在の担任である杉浦先生は、他の生徒と同じように扱ってくれる。

隣町から来た若い男性教諭は、村の「空気」に流されず、しばしば私を職員室に呼び出しては他の教師の鬱陶げな眼差しを余所に、悩み事の有無や勉強のことについて積極的に尋ねてくれる。

「何でもいいから、困ったことがあったら言ってくれよ。生徒の為だったら何でもするぜ」

一通り話が終わった後、先生は決まってこんな感じのことを私に言ってくれる。おそらく、私の一族の風習が原因であることも、よく分かっていないのだろうが、こう言われるとわずかだが安心する。

正直言うと、私は先生に対してほのかな恋心を抱いていた。束縛された家での空気に対する嫌気が、開かれた場所から訪れた男性への憧れを産んだのかもしれない。

学校を出たら、先生に想いを打ち明けよう、そして一緒に町へ連れて行ってもらおうとも考えたが、到底無理だ。この閉鎖的な地域で、生徒と教師の恋愛など、到底受け入れられることではない。ましてや、私の家においては・・・。

結局、この家に産まれたこと自体が、そもそもの不幸だったのだ。

最近ではそういった諦念を胸に、このくだらない慣わしを黙々とこなしている。

この家が嫌いだし、家族もこの風習も大嫌いだ、何よりあの森が一番憎い。祖父や両親はこの不気味な場を心から恐れ崇めているようだが、私は違う。

そんな得体の知れない場所なんて、焼いてしまえばいい。私を束縛するものの正体は、結局はこの森なのだ。恨みこそすれど、崇拜などするものか。

森へとたどり着いた時、最初はそれが水たまりか何かだと思っていた。昨日も強い雨が降っていたからだ。

でも、近づいてみて、その強烈な臭いが鼻をよぎって、分かった。

血だまりだ。入り口を塞ぐかのように、濃い血液が地面を染めていた。

気づいた瞬間、すぐ家へと走った。駆けている間、ずっと背後に誰かが追いかけてきているかのような気配を感じ、とにかく追いつかれないよう、必死になった。

玄関に着いた時はすっかり息が上がっていて、それに扉を勢いよく開いて音を立てたのも相まって、家族が皆揃って駆けつけてきた。

台所でコップ一杯の水を一気に飲み干した後、私先ほどの異変を興奮気味に語った。

ひょっとしたら、誰か死んでるのかもしれない、どこかから逃げてきた殺人犯が、あそこに隠れているのかもしれない。

全部は覚えていないが、思いつく限りの事をとにかく口に出し、危険を必死に訴えた。

母も父も、そして祖父も私の話を黙って聞いていた。だが話し終えてからしばらくすると、祖父が何か考え込んでいるような表情で仏間の方へ歩いていった。

「・・・ねえ、警察に通報しないと」

立ったまま祖父を待っている両親に、私は焦る気持ちを感じていた。

「馬鹿言え」

「でも・・・」

「家のことだぞ？ 余所もんに言えるか。お祖父ちゃんが許さんって分からんか」

父親は侮蔑するような顔で私を睨んだ。

「全くこの子はいいい年して、そんなことも分からんのかねえ」

母も同様だ。

30分程経った後、祖父が櫓でできた手桶のようなものを持って戻ってきた。おそらくかなりの年代物なのだろう、すっかり黒ずんでいて、取手の部分は所々がかけて今にも外れそうだった。

「今から森に行く、ついてこい」

その言葉を聞いて、愕然とさせられた。警察にも連絡しないばかりか、もう一度戻るだなんて。

「何渋ってるの、家の役割ぐらいちゃんとしてよ？」

なんとも鬱陶しそうな目で、母が私を睨む。この時、まるで一瞬のうちに自分が生きてきた今までの生活から切り離されたような、ぞっとするような感覚を覚えた。

「家の為に動けんというのか？」

ぐずる私に、祖父が嫌悪感を露わにしている。

昔から皆、「家」が第一なのだ。怒られる時、必ずと言ってよいほど、こう言われた。

――家の女として恥ずかしくないのか

――家の子として見られたくないようなことをするな

得体の知れない家という概念に縛られ、その下に行動を定める。私の家族は異常なんだと、改めて思う。

だが、私もまた黙々とそれに従わざるを得なかった。

それでも、自殺した祖母を除いて、私は家族の誰からも可愛がられなかった。まるで産まれてきたことそれ自体が悪であるかのように、蔑まれ、見下され、今日まで生きてきたのだ。

月も出ていない真夜中の道、祖父の背中について歩く。

正直、あの人に遊んでもらった記憶なんて、ほとんどない。いつも偉そうにしている、常に不服そうな目つきをしている80歳の陰気な老人。精神的に成長していくに連れ、彼の印象はどんどん悪くなっていく。

数分歩いて、森に着いた。

祖父は特に動揺もせず血だまりを眺めていたが、しばらくすると手にした桶でその血を掬った。その光景を見て、て言いようのない悪寒を覚えた。

家に帰り、桶の縁から垂れる血をよく見てみたが、紅色というより濃い紫色で、人間のものとは思えなかった。

祖父は居間に皆を集め、ちゃぶ台に先ほどの桶を載せた後、しばらく席を外していた。父も母も、桶を見つめたまま黙っている。

時間が経つに連れ、血の臭いが部屋中に充満し、不快な気分になる。とても耐えきれず、外に避難しようと扉に近づいた時、祖父がぬっと姿を現した。

「どこいくつもりだ、座れ」

渋々私が席についたのを見計らい、祖父は手に持ったぼろぼろの書物を開き、家族皆に言い聞かせるようにつぶやき始めた。

「追川の森、之もし何かしらの凶事あれば、必ずや森の口に鮮血流るなり。然るに、番頭の者、その血を以て一族皆喉を潤すべし。さすれば皆獣の如き様態なりて互いに喰らい合わんとす。しかるに一族の内一人斃れたる者、森の口に捧げるべし。さすれば災い去りぬ、もし之儀果たさざれば、追川の姫封ざる場より出でて、一族皆喰らわぬなり」

「つ、つまりどういうことなんですか」

父が恐る恐る尋ねる。私の前では威張り散らす癖に、祖父の前ではこの調子だ。

「森に血が流れているのは、凶事の予兆やちゅうことだ。このままほうっておけば、『追川の姫』なる亡者が現れ、我々を皆喰い殺す」

「そ、それは迷信でしょう・・・？」

「馬鹿もんが！」

祖父は母の言葉を怒鳴り声で打ち消した。

「今まで何百年と続けてきた森の口への供えもの、お前はそんな生半可な気持ちで続けていたのか！？ ええ！？ ならこの度の凶事、お前の仕業ということになるぞ！」

「い、いえ！ 違います！」

「誠か！」

「はい、断じて！ 余計な口を挟んでしまって、申し訳ありません・・・」

祖父の剣幕に押され、母は頭を低くした。この人は祖父と父、両方の言いなりだ。親戚筋から嫁に行けと言われてやってきた、自分の意志のない人なのだ。祖父か父に媚びへつらい、彼らに命じられれば私を平気で殴ることすらある。

「実を言うと、この凶事が起きるのは随分前から分かっておった」

祖父が再び話し始める。

「これが起きるのには前触れがあつてな・・・」

女だ、と言って祖父は私を指さした。

「この娘がその、凶事を運んできたってことですか」

「そう、まあ疫病神みたいなものだ」

「なんだ、性格も素直じゃない、けったいな奴だったのはそういうわけか」

家族の暴言に、私はじっと耐えた。酷い、いくらなんでもあんまりだ。

「しかし、この凶事を防ぐにはどうすれば・・・」

「これを飲め」と、祖父はちゃぶ台の上の桶を指さす。

「この血を飲むと、わしらは獣の如き残忍な本性を剥き出しにする。

その結果、犠牲となった者の亡骸をあの地に捧げれば凶事を避けられる」

血を飲む・・・？

犠牲、亡骸・・・？

この人は何を言っているんだ？

「誰か一人が生け贄になれば、家は助かるんですね」

「その通り。儀式を司る者達がこの血を飲んで、一族の誰かを殺せばいい。以前も行ったゆえ、手はずはわかるとる」

以前って・・・。

その言葉に、身体が自然と震える。

「60年前、わしは十五になる妹を殺した。今日のように森の口に血だまりが現れてな。父の言うことに従ってこの血を飲むと、たちまち罪悪感が消えた。そして覚悟を決めたあやつを、鉈でばっさりと斬り殺してやった」

家に忠実な娘だったと、祖父はしれっと語ってみせた。

そんな・・・。

それじゃあ、人殺しじゃない！？

「それだったら話は早い」

父は一切躊躇を見せることなく、右手を桶に突っ込み、中の液体を掬いにとって、一気に飲み干した。

「家が助かるのなら・・・」

それに続き、母も右手を血に染め、自身の口に注いだ。さすがに飲み終わった後、その味に対して不快そうな表情を一瞬浮かべはしたが、すぐに晴れ晴れとした顔になった。

「ああ、何だか身体の中が熱くなってきたぞ」

「本当、誰かを傷つけたくって仕方がないわ」

意気揚々と語る二人を見て、祖父が珍しく微笑んだ。

「準備はできたな」

両親が私を見つめる。父の表情はにやけこそしているが、先ほどとは打って変わって目が異常なまでに血走っていた。

母の方も、普段の臆病さが嘘のように消え、殺意に満ちた笑顔を浮かべている。

「代々生け贄は、生娘と決まっておってな」

「ガアッ！」

右腕を掴もうとした父の手を払い、血の入った桶を叩き飛ばして私は外へ逃げ出した。

冗談じゃない！

誰のものか分からない血を飲んで、おまけに娘を殺すだなんて！

前々から思っていたけど、やっぱりこの家は狂ってる！

「助けて！ 誰か助けてえ！」

民家を見つける度に必死で叫ぶが、誰も応えてくれない。窓に灯りが点っている家さえあるのに、関わろうとしない。

皆、私を見捨てるつもりだ。

私は藁にすがる思いで、担任の杉浦先生の家へと走った。

深夜、廃屋を改修して作られた海沿いの一軒家。迷惑も省みず戸を叩いた私を、先生は神妙な面持ちで迎えてくれた。

「おまえの家はそんな恐ろしいところだったのか」

居間で私の話を聞き、先生は愕然としていた。

「正直、この村の空気はどっか変だと前々から思ってたが、そうか、お前ん家のおじいさんが原因か・・・」

恐怖映画のようなことが実際に、しかも自身の生徒の身に起こっているのだから、驚かざるを得なかったのだろう。

「待ってくれよ、今すぐ警察に連絡してやる」

「先生、待って下さい！」

「なんだ？」

「・・・もう、この村出て行きたいんです」

先生は頼もしげな表情で私の顔を見つめ、答える。

「大丈夫、警察が連れて行ってくれるから、安心しな」

先生は電話器のある玄関へと出て行った。

一人残された私は不安でたまらなかったけれど、同時に奇妙な胸の高鳴りを覚えていた。

さっきの言葉、上手く伝えられなかった。

「先生と一緒に出て、自由に暮らしたい」って、はっきり言えなかった。こんな状況なのに、先生との関係のことが頭に浮かんで仕方がない。

私は、殺されるかもしれないのに・・・。

ぼーっとした頭を冷ますのも兼ねて、周囲を見回した。

部屋には灯りが点いていて、電気ストーブが暖かだが、外はまごうことなき真っ暗闇。その中から今にも家族がぬっと顔を現すのではないかと思え、背筋が寒くなった。

玄関の方から、電話のコールが聞こえてくる。先生が警察に電話をかけたのだろう。

だがそのすぐ後、扉が勢いよく開いたような音がした。更に、猛獣が吠えるような声が聞こえてきた。

「誰だお前等！」

先生の声だ、私は急いで玄関へ走った。

「早く逃げろ！」

先生の怒鳴り声が聞こえた。そしてそれから間をおかずして、痛ましい叫び声が屋内に響いた。

玄関へ走った私は、その光景を見て絶句した。

母が先生の胸を、両手で構えた鋤で貫いていた。

先生は白目をむき、ガクガクと小刻みに震えている。

母は真っ赤に血走ったその目で、犠牲となった先生の姿を見ながら、不気味な声で笑い続けた。

私は裏口へ走り、急いで逃げた。

あれは母だが、母じゃない。人ならざるものだ。きっと、あの血を飲んでおかしくなったんだ。

灯りなき夜道を必死で逃げる。とにかく、駐在所に駆け込もうと、ひたすら走った。

だが、そこまで行くには自転車ですら20分かかる。

だんだん胸が痛くなり、息が荒くなる。でも、行かなければ。捕まったら、殺される。

山沿いの道に出たところで、後ろからハッハッハッと、くぐもった息づかいが追いかけてきた。

足を止めずに後ろを見やると、母が追いかけてきていた。

犬のように舌を剥き出しにし、唾液を垂らしながらこちらを捕まえんとしている。

駄目だ、追いつかれてはいけない。

あれは、獣だ。

心臓が破れるかというぐらい激しく痛み出したが、私はもっと足に力をこめた。

荒い息づかいが一定の間隔で、近づいたり離れたりしている。

私は足が速い方ではない。本来であれば、とっくに追いつかれているはずだ。

多分、わざと追いつかないのだろう。楽しみ尽くした挙げ句、狩る。

実の娘で、狩りを楽しんでいるんだ・・・！

頭の中が絶望に包まれる。

ふと、下半身の辺りが一瞬冷たくなって、足を液体が伝っていく。

失禁してしまった・・・。

ものすごく惨めだ。もう、嫌。

でも、死にたくない！

あいつらの獲物になりたくない！

最後の希望を、駐在所に賭けて走った。

ようやく、村の菩提寺へと続く道が見えた。駐在所はこの途中にある。

助かった！　と思った途端、ふいに前から何かがぶつかってきた。

私の身体は押し倒されるようにして崩れ、土に頭がぶつかる。そして私の喉元に鈍く光る金属が思いっきり押しつけられ、そのまま横に強く引かれた。

喉に感じた灼けるような苦痛とともに、そこから勢いよく鮮血が噴き出した。助けてと叫ぼうとしても、声が出ない。口から出た息はすべてひゅうひゅうと空を切るばかり。

父が、私の喉元を鉈で切り裂いたのだ。おそらく、待ち伏せをしていたのだろう。

私は、彼らの獲物になって狩られた。そしてこれから、死んでいくんだ。猟師にやられた、鹿や猪と同じ。

すごく痛いし、哀しい。

なにもかも、これで終わりなんだ。

自然と目から涙が溢れて、頬を伝った。

でも、私はなかなか死ななかった。喉は真っ赤に抉れて、息をしようとする度ごぼごぼと血のあぶくがそこから飛び散るのに、かろうじて生きていた。

服を血に染めた両親は互いに顔を合わせて笑い、私の両手を持ってひきずりながら歩き始めた。

「あーあ、やっちゃったやっちゃった」

二人の残忍な会話も、目の前に見える光景も、苦痛のあまりすべてどうでもよくなってくる。

痛い、早く死にたい。

その思いもむなしく、私はそのまま家へと運ばれた。

焦点の合わない目の前の映像に、祖父の姿が映し出される。

「二人ともよくやった。これで家は安泰だ」

祖父の労いの言葉に、二人は喜んだ。

「ちょっとドキドキしたけど、以外と楽しいもんですねえ」

「こんな儀式だったらいつでも大歓迎ですよ」

「しかしまあこの愚かもんが。何で素直に死のうと思わんのか」

「本当、私達の躰がなくて、ごめんなさいねえ」

「自分の役割も分からぬ馬鹿者めが」

一方的な罵倒を受けながら、私は森まで運ばれた。

そこで服を剥ぎ取られ全裸になった私の死にゆく身体は、血だまりの上にもものでも扱うかのよう
に落とされた。

「いやあ、我が娘ながらいい身体だなあ」

父は私の未発達な肢体を見て舌なめずりしたが、祖父に睨まれて申し訳なさそうに首をすぼめた。

「ともかく、こうやってこの阿呆が死んでくれて余計な手間が省けた。これで家も安泰じゃ」

「いやまったく、ははは」

祖父が皆を連れて帰り、私は寒空の中に死にかけのまま取り残された。血の冷たさも、風の辛さも、食い破られた喉の痛みすらも、全てがどうしてもよいものを感じてきた。

心臓の音が段々早くなり、そして弱々しくなっていくのが分かる。ようやく死ねるような気がしてきたと安心すると同時に、哀しくなった。

曲がりなりにも家族として一緒に過ごしてきた人間が動物のように私を殺して、邪魔者として私を捨てた。

憎しみにも似た、悲痛。

私は何の為にこの家に生まれて、死んでいくのだろうか。

ぼんやりと消えそうな意識の中でも、うっすらと涙が頬を伝うのが感じ取れた。

悔しい。でも、もう何もできない。せめて、安らかに死なせて・・・。

自分への慰めを込め、そっと目を閉じた。全てが闇に包まれていく。

(そなたは、恨めしくないのですか?)

声が聞こえた。

(誰・・・?)

透き通ってはいるが、どこか生気を感じられない冷たい囁きが、夜風に揺れる木々の中から聞こえてくる。

身体がふわりと浮き上がるような感覚がして、目が自然に開いた。

意志に足が動いて、私の身体は勝手に森の中へと入っていった。

暗闇に包まれた樹林の集まりは、鬱蒼とした雰囲気漂わせていた。

見たこともないおどろおどろしい草花が我ばかりと不規則に伸び散らかし、ほとんどの樹には、毒々しい色の粘菌や苔がびっしりと貼り付いている。年を経て朽ち倒れた枯れ木を、片腕ほどの大きさもありそうなムカデが這い、そこで捕らえた蜥蜴の体液を啜っていた。

私が歩いていく度に、身体はどこかが木の枝や伸びた雑草に触れる。

この身体がどこまで先へと進んでいっても、この真っ暗な迷宮はあたかも同じ場所が延々と続いているようで、この場所が死者の国であるように思わせられた。

どれくらい彷徨い歩いたのか。私の亡骸は不思議な場所へとたどり着いた。樹木がそこを避けるように生えていて、落ち葉や朽ち木すらすらくなく、地面がむき出しになっている。

まるでそう決まっていたかのように、私の身体はその場に崩れ落ちた。

(喰らいたくないのですか？ そなたの家族を・・・)

あの声が、再び聞こえてきた。

(誰・・・?)

(血を分けた人間にも関わらず、あなたを虐げ、殺めた。その恨みを残して死ぬのですか・・・?)

私の思いの中に、刺々しい感情が入り込んできた。今までの人生の中における束縛、今夜の残忍で理不尽な仕打ち、全て忘れることができないくらい、焼き付いている。

(嫌だ、許せない・・・)

(ならば、喰らいなさい)

目の前から、不透明な人型の物体が迫ってきた。それに驚いて意識が目覚めた次の瞬間、私は入り口の前に立っていた。

真冬の深夜なのに全く寒さを感じず、先ほどまでの苦痛がウソのように消えている。

逆に、ふつつつと胸懷にどす黒いものが沸き上がってきた。

喰らわなければ。

私は自分の意志で、家に向かった。地面を踏む度、どこか実感が掴めない、宙に浮いたような感触がする。

私は、どうなってしまったのだろうか。だが、それよりも、血が欲しい。恨めしいあいつらの血を喰らいたい。

家に帰ると、玄関のすぐ側にある便所に灯りが点っていた。

扉を開くと、父が間抜けな格好で便器に跨がり、用を足していた。

何の価値も見出せぬクズ男は私の方を振り返り、愕然とした表情で怯え始めた。

「や、ややややや」

命乞いのつもりだろうが、声が出ないようだ。逃げたくても右足が便器にはまってしまって抜けないらしい。

私はその汚い首根っこを掴み、そのまま力を入れた。

ぶぎゅっ！とネズミの断末魔のような声を挙げ、勢いよく血を吹き出し、私の顔に降りかかった。

今まで味わったことのない、凄まじい快感が全身を駆けめぐる。

更に力をこめ、勢いよくこの屑野郎の首元を持ち上げた。ズッ！と音がして、細長い頸椎ごと首が抜けた。

そうして、私の父であった便所虫は間抜けな表情のまま息絶えた。

流れ落ちる血液を服が汚れるのもかまわず存分に味わっていると、ひいっ！と後ろで声が聞こえた。

振り返ると、母が大慌てで居間へと逃げようとするところであった。

ためらうことなく、私はそれを追った。走る度に、まるで何かが抜け落ちたような身体の軽さを感じる。

母は居間の隅に、裁縫用の鋏をこちらに構えながら、へたり込んで震えていた。

「く、く、く、来るな！ ば、化けもの！」

声を出すことすらやっこのようだ。

私はゆっくりと彼女に近づいていく。

「ひいいい！」

鉋が私の腹部に突き刺さった。だが、全く痛みは感じない。

私は両手で母のこめかみを掴んだ。

「やめ、やめ、ややや」

呂律の回らぬ口で命乞いするこの女の両目を親指で押さえ、ゆっくりと力を込めた。

断末魔の悲鳴というのは、大体皆同じのようだ。屠殺される家畜のような、理性の感じられない弱者の叫びを上げる。そういえば、私も死ぬ時にこんな声を上げようとしていた気がする。そう考えると、なんだか恥ずかしい。

眼窩から夥しい血の涙が溢れ、頭が波打つように震える。

でも、もっとぐっぐっと押し込んでやる。そのうち奥まで達したようで、それ以上中に入らなくなった。

それも構わず更に力を込めたら、半熟卵みたいに潰れてしまった。

そして、この能無し女はぶっ壊れた。

事切れたのか、それともゆっくり死んでいくのかは分からないけど、時々思い出したようにピクピク動くばかりで、とても生きているようには見えない。

畳は母がひり出した黄茶色の液体に汚れてしまって、すごく見苦しい。

ふと思い出して、お腹に刺さった鋏を抜く。裂けた傷口から、真っ黒な血がびゅっと噴き出た。

側にあった姿見に目をやると、すっかり変わり果てた私が映っていた。

顔は土気色で、その眼は光無く黒ずんでいる。喉笛の切傷は思った以上に深く、このまま首を後ろに強く倒せばそのまま取れてしまうんじゃないかというぐらいに抉れていて、血管らしき赤い管や骨のような身体の一部が見え隠れしている。それを見てやっと、自分が死体なんだなって理解できた。

今思い出したけど、そういえば私、服を着てなかったっけ。生みの親の血や肉片が、私の未熟な乳房や陰毛を朱に染め上げていて、何だか奇妙な照れくささを覚えた。

手についた目玉の濁り汁を舐めてみる。味はないけど、何故か苦みがあるような、変な感じ。なんかウツトリしてしまう。

とっくに死んじゃってるのに、まだ動いてる私。ホラー映画みたいでちょっとカッコいいかも、自分。

あ、そうだ。祖父のことを忘れていた。

私は階段を上がり、二階へと向かった。途中、鼻歌を口ずさもうとするが、喉から空気が漏れてしまって上手くいかない。

襖を開けた途端、右目に鋭い剣先が飛び込んできた。扉のすぐ近くで待ちかまえていた祖父が、家に伝わる神剣で私の右目を突き潰したのだ。

「追川の亡霊が！ 死ねえ、死ねえ！」

ぜんぜん痛くないけど、ちょっとイラッとした。

慌てて刀を引き抜こうとする祖父の右手を掴んで、そのままひねり潰してやった。

今まで一度も聞いたことのない、赤ちゃんみたいな声を出して、老人は悶え苦しみ出した。

何重にもねじってやった、もう直るはずのない自分の右腕だったものを、なんとも哀れそうに見つめながら。

クソジジイめ、悶え死ね。

私は調子に乗って、右足を掴んで同じ目に遭わせてやった。おまけに左足、そして右手。

「ほれほれ、どうじゃどうじゃ！ 凄まじい痛みであろう！ 目すら開けていられんじゃろう！」

自分の意志に関係なく、口から自然と言葉が出る。私は喉が破っちゃったからもう喋ることができないだろうし、そもそもこんな綺麗な声じゃない。

「うびゅびゅ、うびゅう！」

四肢が壊れたバネみたいになって、黄色い液体を延々と吐いているこいつに向かって奪い取った宝剣で色んな箇所を突きながら、私は勝手に汚い言葉を浴びせ続ける。

「それ！ もっと苦しめ！ 苦しみ抜いて地獄へ落ちろ！ そなたら一族の宿命じゃ！」

そうだ、死んだ後に話しかけてくれたあの時の声だ。今、私の中にいるんだ。

彼女に応えるつもりで、祖父の右腕に触れ、野菜みたいに引き抜いてやった。

「うば、ば！」

老害の口から汚い血の泡が溢れる。どうやら舌を嚙んでしまったらしい。

私は一切遠慮することなく、干し雑巾のような彼の腕を、口の中につっこんでやった。

「ほほほ！ うまいか！ わらわがしっかり喰らわせてやるぞ！」

ものすら口々に食えない老いぼれの腕を激し上下させて、もっと奥深くに突き入れる。

その内、その喉は水風船のように醜く膨れ上がり、それに連れて顔の色がどんどん紫がかっていった。

更に、左指で目玉を掻きだそうとぐちゅぐちゅ力一杯かき回してやると、びっと血管の千切れる音とともに、古ぼけた眼球がころりと畳に転げ落ちた。

よっぽど苦しいのか、なにやら呻いているが、もはや声すら聞こえない。

「ほっほっほ！ 死ね！ くたばれ！ 己を喰らって悶え苦しめ！ 畜生が！ 外道が！ 我ら一族の呪いをみたか！」

ようやく分かった。

私の身体の中にいるこの人が、追川の姫なんだ……。

この人が私を立ち上がらせ、復讐させてくれたんだ。

ちょっと、うるっときた。

私を殺した張本人は長い間畳をのたうち回った後、ゴキブリのように手足をばたつかせて息絶えた。

私はそのしわがれた身体に食らいつき、その肉を食い破って辺りに捨て散らかした。

父の肉も、母の肉も、皆骨までバラバラに飛び散らせてやった。眼球を噛み砕き、骨を割って汁を啜り、歯を一本ずつ千切り取って呑み込んだ。

喰いたかったからじゃない、壊したかったからだ。

私の恨み、先生の恨み、そしてあの人の恨み。

この家の憎きものを全て破壊した後、私は行くべきところへ向かった。

夜が明けるまでに、帰らなきゃ。

追川の姫の怨念が住まう、禁忌の森。

あんなに嫌だったのに、今ではすごく暖かな場所に思えてならない。

臆することなく、中に入り、そのままずっと歩き続ける。

全て理解している。私は二度と、この森から出ることはない。

かつてこの地に逃げ込んだ追川の姫。彼女がどのような最期を遂げたかは分からない。彼女は自分を死に追いやった人々への復讐心を募らせていたけど、ずっと押しえ込まれ続けていた。

私達家族の先祖が身内を犠牲にして、封印していたのだ。

生け贄となった家の女達はみんな従順にその運命を受け入れたけど、私はそうじゃなかった。

理不尽な儀式に反抗して、惨たらしく殺されちゃったけど、そうして生まれた私の強い無念が姫の怨念と混ざり合って、彼女は外へと出ることができた。そして、復讐を果たすことができたんだ。

これから私の身体は徐々に朽ち果てていく。

そしてその魂は、漂う姫の恨みと融合し、この森の邪気の一部となって永遠に生きていくだろう。

生きていた人間だった頃には到底味わえなかった、形容しがたい幸福と快感に包まれていく。

血の繋がりだけの偽りの関係ではない、想いで繋がった本当の家族、そして本当の居場所。

自然と、笑いがこみ上げてきた。

ここまで笑ったのは初めてだ。

私達の諸声は、いつまでも森の中に木霊していた。

(完)

血だまり森の屍姫

<http://p.booklog.jp/book/93201>

著者：エンジン

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/lazeengine/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/93201>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/93201>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ